

「雑草魂」山根 つかんだ好機

Jリーグのユース(高校年代)に落選してエリートコースを外れ、大学ではレベルの高さに面食らい、何とか入ったプロではクビにおびえる。サッカー日本代表DF山根親来選手(21)川崎フロンターレは、何度も壁にぶつかっては乗り越えてきた。ワールドカップ(W杯)カタール大会で27日に同国アルラヤンで行われた1次リーグ第2戦コスタリカ戦で、28歳にして初めて最高峰の舞台に立った。

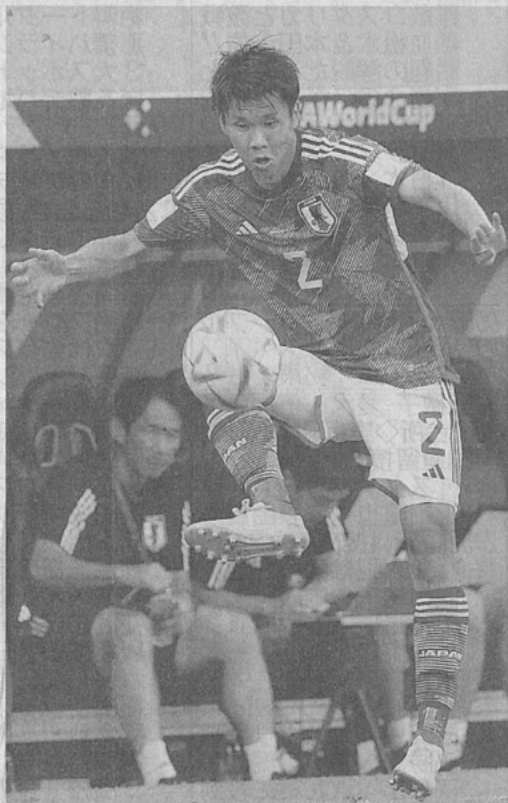
コスタリカ戦に先発出場

11年前の東日本大震災が、運命を変えた。

「僕のサッカー人生は、巡り合わせやタイミングが良かった。そういう(出会った)人たちのおかげ」

W杯代表が決まった1日、川崎市内で記者会見した山根選手はそう感謝した。

横浜市出身で兄の影響で5歳からサッカーを始め、小中学生で入っていた



①コスタリカ戦の前、右サイドでトラップする山根親来選手。カタール・アルラヤンのアマド・ビン・アリ競技場で27日、宮武祐希撮影。②ウィザス(現第一学院)高サッカー部時代の山根選手。同校提供

努力家 DF転向で開花

た」といい、目立たない選手だったという。

2011年3月11日。高校2年生の時に震災が起きた。グラウンドにひびが入るなどの被害もあって、寮生は帰宅を余儀なくされた。山根選手は練習場所を探中、父親が自宅近くの大学の指導者と知り合いだった縁で春先に約1カ月、練習に参加できることになった。

当時桐蔭横浜大サッカー部監督だった八城修さん(51)現総監督の目にも、技術的に秀でているように映らなかった。しかし、「うまくいかなかったも

臆せずやっていた」という姿勢に魅力を感じ、高校卒業後の入部を勧めた。

無事に合格した山根選手は「たまたま上級生が抜け

て空いていた(八城さん)

という攻撃的な中盤のポジションで1年生から試合に起用された。当時所属した

関東1部リーグの相手は流通経大や明治大、筑波大といった強豪ばかり。八城さんは「親来はレベルの差を感じて、行き詰まっていたんじゃないかと振り返る。

それでも徐々に力を伸ばして主力に成長。4年生の9月には、天皇杯全日本選手権の2回戦でJ1湘南ベルマーレからゴールを奪う活躍を見せた。3-4で敗れたが大善戦し、これが湘南関係者の目に留まってプロへの道が開けた。

プロ1年目はJ1リーグ戦で1試合にベンチ入りしただけで出場なし。八城さんに「やばい、クビになるかも」とこぼしたこともある。しかし、ディフェンダーへの転向で道が開ける。プロ2年目の17年、チームがJ2で戦う中でレギュラーをつかみ、1年でのJ1復帰に貢献。20年にはJ1屈指の強豪、川崎に移籍し、右サイドバック(SB)として存在感を高める。21年3月、27歳にして初めて日本代表に選ばれると、韓国戦で先制点を挙げる鮮烈な代表デビューを飾り、その

のまま代表に定着した。

守備の選手ながら、不思議とチャンスに顔を出す神出鬼没の動きが持ち味だ。J1では18年以降毎シーズンゴールを挙げている。日本代表ではW杯開幕時点で15試合に出場し2得点をマークしている。

元々は前線の選手だったが高校で守備的中盤の「ボランチ」にコンバートされた。大学では攻撃的なポジションに移り、SBを任せようとした八城さんには「そんなにディフェンスをしていたら攻撃の力がなくなる。得点を取りたい」と言ったこともあるが、プロではそのSBで開花した。

大石さんも八城さんも「努力家で真面目」と評する。

コスタリカ戦では得意の攻撃参加を見せたが、得点にはつながらず、後半17分に退いた。日本はその後に失点して0-1で敗れた。

山根選手は試合後、「(W杯の舞台に立てて)うれしさはあるが、もうちょっと自分のところで何か起こせれば良かった。これで終わっちゃいけない。切り替えてや

っていく」と、他の選手にはない「雑草魂」で挑み続ける。